

# 第 I 章 序 言

## 第 1 節 発掘調査の経過

### A. 本書の目的

この発掘調査報告書は、宇治市宇治妙楽 55 番において株式会社泰明ハウジングが計画したマンション建設に先立ち、宇治市教育委員会が平成 16 年度に実施した宇治市街遺跡発掘調査の内容と成果を記録するものである。

### B. 届出書の提出と協議経過

平成 16 年 5 月 26 日付で株式会社泰明ハウジング金城泰然氏より、中世の集落遺跡である宇治市街遺跡に該当する宇治妙楽 55 番地における開発行為に関して、文化財保護法第 57 条の 2 第 1 項の規定により届出があった。開発計画の概要は、敷地面積 3808.99 m<sup>2</sup>に建築面積 1835.59 m<sup>2</sup>の地上 7 階建てのマンションを建設しようとするもので、基礎掘削は現地表面からマイナス 350 センチが計画されていた。当該計画地の現状はアスファルト舗装の駐車場であった。

当該地は、宇治橋西詰から宇治市街中宇治地区を南西方向へ通る宇治橋通り（新町通り）に面しており、平安時代に創立された平等院より直線距離にして約 350 m 西に位置する。中世の集落跡とは別に平安時代の貴族に関係する別業跡の存在も想定できる史的価値の高い場所であることから、埋蔵遺構の詳細な実態把握の必要性と当該開発工事の基礎掘削による遺構・遺物の破壊は明確であるとして、発掘調査実施の方向で協議を行った。

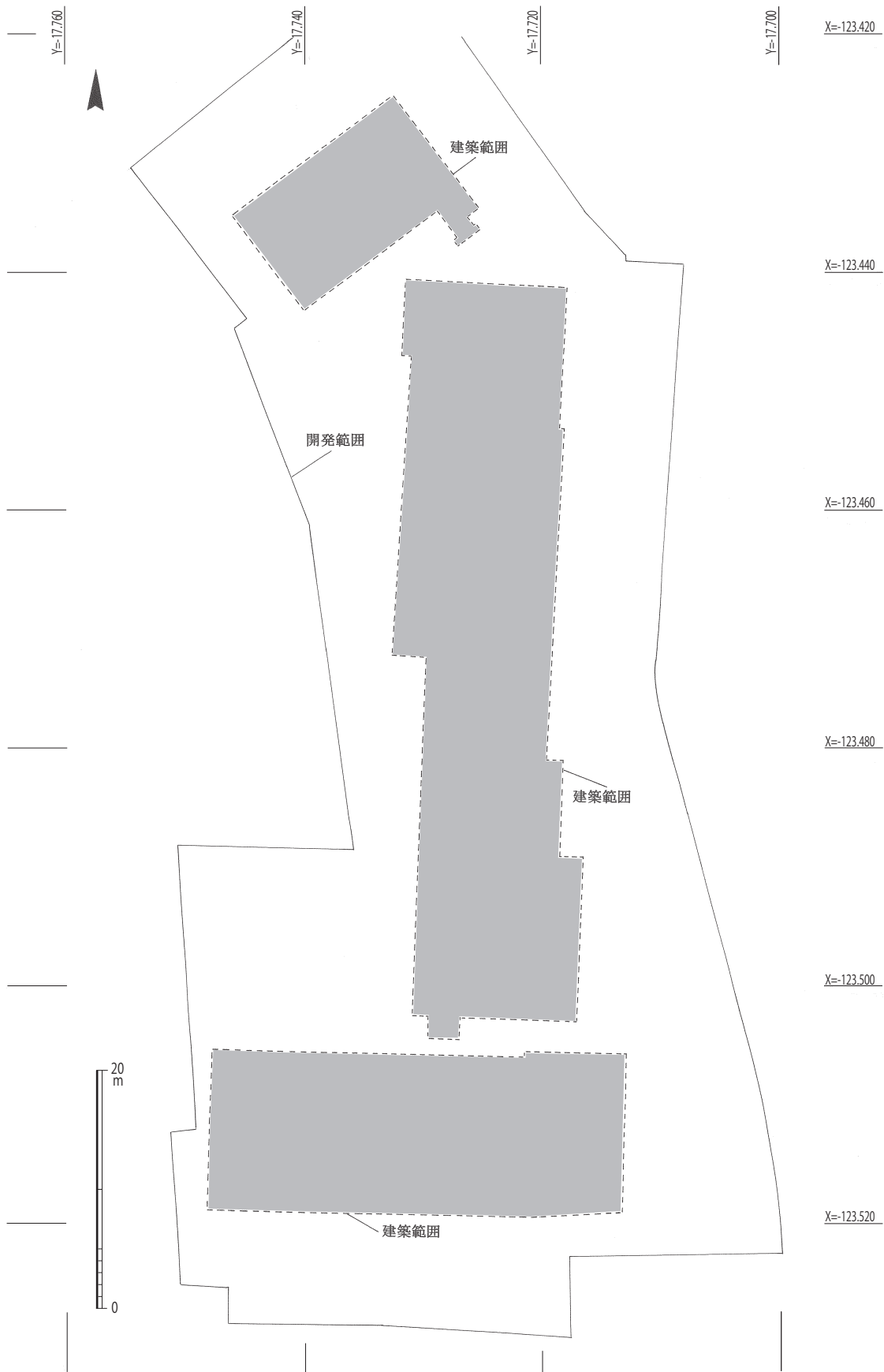
### C. 発掘調査の実施

発掘調査にあたっては、事前に地元町内会を対象とした開発に関する説明会を行い、また発掘調査する旨を町内会長通じて回覧して周知した。報道機関にも発掘調査を開始する旨の書類を通知した。このような準備作業を終えた後、現地調査を開始した。

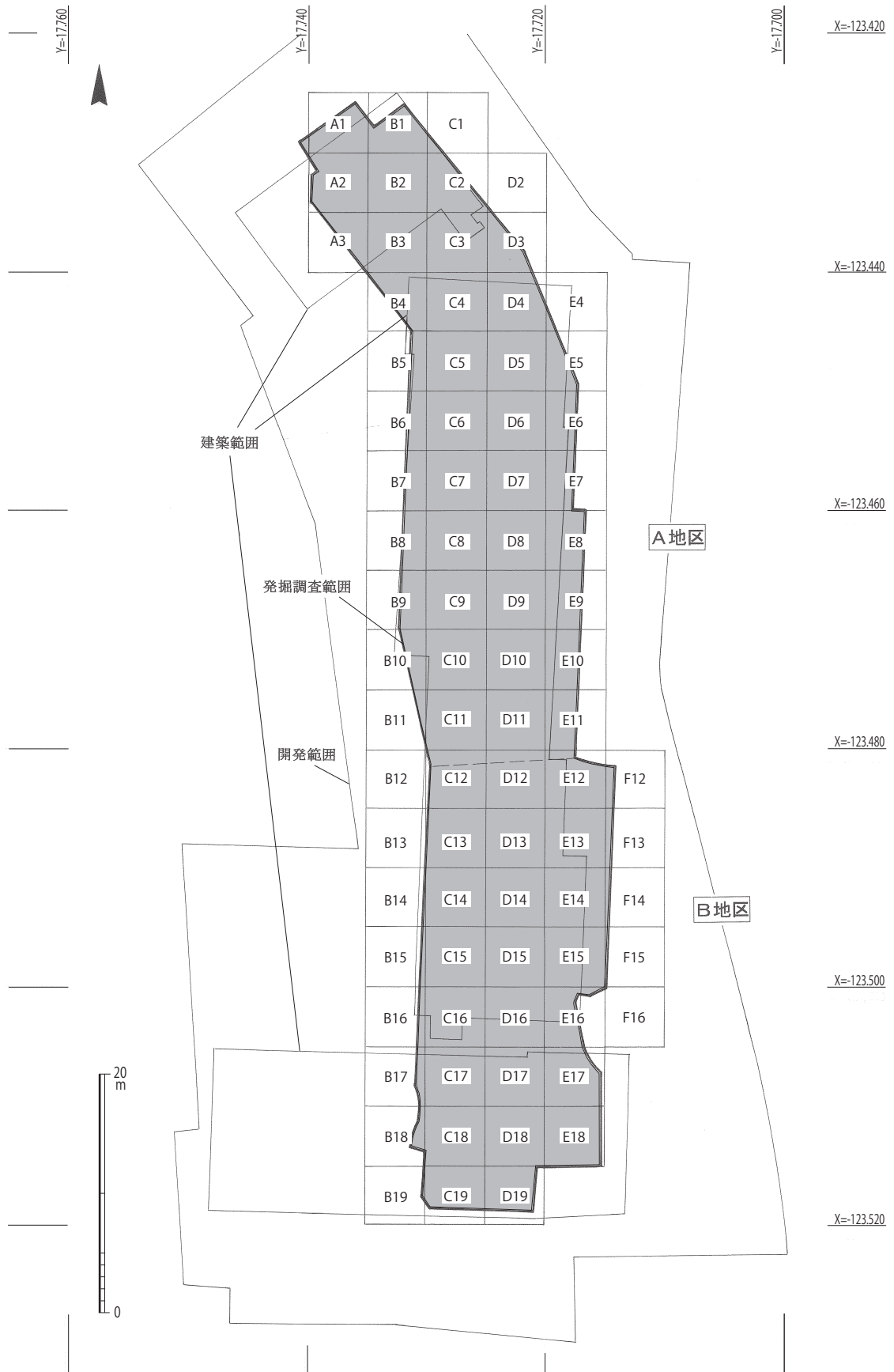
平成 16 年 8 月 9 日に現地の発掘調査に着手し、文化財保護法第 58 条の 2 第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の着手通知については 8 月 11 日付けで行った。発掘調査面積は 1300 m<sup>2</sup>を設定したが、排土の処理は現地に仮置きにて、全面一括で調査を行ったとすれば、場所の確保が土量の計算上困難であると考え、範囲を分割設定して調査を行うこととした。全調査区を北部 750 m<sup>2</sup>と南部 550 m<sup>2</sup>に 2 区分し、北部を A 地区、南部を B 地区とした。

発掘調査は、まず重機により調査範囲を被覆しているアスファルトの除去を行ったあと、土層および遺構の大よそを把握するため、A・B 両地区通して 5 箇所を先行して部分掘削を行い、地下の様相を確認した。A 地区北東隅の掘削地点から地表下約 150 センチの黒灰色土層で井戸枠、瓦溜が確認できたところから、その層を基準に本格的に重機掘削を行い A 地区の調査を開始した。重機掘削終了後は、包含層掘削、遺構検出および掘削等はおもっぱら人力で行った。また当該遺跡でも発掘資料の少ない古墳時代の遺構、遺物が A 地区北端にて確認できたことを受け、その重要性からもさらに詳細を把握するため、11 月 15 日から北側の範囲の一部を拡張し調査を行った。

B 地区の調査着手は、B 地区に置かれている A 地区の排土の移動および A 地区一部南側の埋め戻し作業を終えた後、重機による表土掘削を 10 月 12 日より開始した。掘削深度を A 地区南端部の遺構検出面に合わせて、南側から北方向に掘り進めていった。また A 地区で確認されている遺構との関連性やその他重要な遺構の検出する可能性も考慮に入れ、掘削は慎重に行った。B 地区も A 地区



第 1 図 開発・建築範囲



第2図 発掘調査実施範囲と地区割図



第3図 発掘調査各風景(1)



第4図 発掘調査各風景 (2)

と同様に重機掘削終了後は、包含層掘削、遺構検出および掘削等はおもっぱら人力で行った。

遺構及び遺物については図面及び写真撮影による記録作成を行い、遺物の取り上げは随時行った。また、必要と考えられる土壌のサンプリングも数点採取した。実測は写真測量を基本とし、全体遺構図およびトレンチ土層断面図は写真測量のみで行い、遺構断面図および遺構の詳細図は手実測を併用する方法で行った。図面による記録作成後は、データ上必要な箇所の写真撮影を行った。

調査成果の公開については、A地区の調査がほぼ終了した段階で中間報告として、10月14日に報道発表し、16日に現地説明会を行った。最終報告は、11月10日に報道発表をし、現地説明会を13日に行った。

現地説明会は、両日とも午前10時～午後3時まで作業中の発掘調査現場の見学開放と出土遺物の現地での展示を行った。現地見学に際しては、宇治市歴史資料館職員と委託業者とで見学者の対応をした。

2度目の現地説明会終了後、A地区の拡張部分の調査とデータなどの取り残しの有無を確認し、11月18日をもって現地での発掘調査を終了した。11月25日には発掘調査終了届を京都府に提出した。

#### D. 出土品の措置

発掘調査で出土した遺物は、調査終了時の収納状況でコンテナバットに200箱分の数量であった。発掘調査終了後、出土遺物は宇治市歴史資料館に搬入した。

遺失物法に基づく埋蔵物発見届は11月19日付けで宇治警察署に提出し、京都府教育委員会に対する保管証も同日付けで提出した。これら出土遺物についても同日付けで文化財認定された。

#### E. 発掘調査終了後の措置

発掘調査終了後は、掘削状況のまま現地を撤収した。建築計画は予定通り実施され、平成17年度中に完成している。当該敷地内に発掘調査内容を記したアルミ製の説明板を宇治市歴史資料館が監修し株式会社泰明ハウジングが設置した。

#### F. 発掘調査報告書の作成・刊行等

整理作業と発掘調査報告書の作成は、宇治市歴史資料館が直営で行った。

整理作業にあたっては、遺跡・遺構の時期や特徴の判定に関わる遺物、あるいは遺存度が高く時代的特徴を示す遺物で、報告書作成にあたって必要かつ重要な遺物(A)と、遺存度が低く分析対象としては情報量が少ないため今回の整理では特に必要としないもの(B)とに分別した。数量的にはコンテナバットに200箱分となっている。

この発掘調査で作成した記録類及び出土品については、宇治市歴史資料館で収蔵し公開している。



第5図 SD302 断割遺物出土状況

## 第2節 発掘調査の実施方法

### A. 発掘調査の実施主体

本件発掘調査は、株式会社泰明ハウジング金城泰然氏の委託に基づいて宇治市教育委員会が実施したものであり、宇治市歴史資料館が実務を担当した。

### B. 発掘作業の実施方法

現地の発掘調査については宇治市歴史資料館職員が直接担当し、株式会社泰明ハウジングより直接提供を受けた発掘支援会社に監督指示することにより作業を進めた。人員は委託業者が組織した技術員1名、作業長1名、作業員13名程の体制で行った。

発掘調査の体制は下記のとおりである。

#### (教育委員会)

発掘調査主体者：宇治市教育委員会

発掘調査責任者：宇治市教育委員会 教育長 谷口道夫

発掘調査事務局：宇治市教育委員会 教育部次長 櫻木 武

宇治市歴史資料館 館長 吉水利明

同 館長補佐 岡井毅芳

発掘調査担当者：宇治市歴史資料館 文化財保護係長 杉本 宏

同 主任 荒川 史

同 主事 浜中邦弘(主担当)

発掘補助員等：大原瞳・表原勝代・渡辺貴代・大坪州一郎・小川藍・志村みどり・久保千恵子  
田中元浩

#### (発掘作業)

提 供 者：株式会社泰明ハウジング

支援会社名：株式会社サポートスタッフ(代表谷口尚之)

発掘技術員：桑宮慶一

発掘作業員長：高木孝之

#### (協力者)

本発掘調査の実施にあたっては、多くの方々からご協力・ご教示いただいた。

## 第Ⅱ章 宇治市街遺跡（川西地区）の概略

### A. 宇治市街遺跡（川西地区）の環境

宇治市街遺跡は、現在の中宇治地区とほぼ重複する古墳時代から近世にかけての集落遺跡である。現在、周知の埋蔵文化財包蔵地として認定している範囲は、宇治川を挟んで東西に1,500 mほど、南北に500 mほどであり、面積54万㎡を測る宇治市最大の遺跡である。遺跡としては川東を川東地区・川西を川西地区とに区分する。今回の発掘調査地は後者のエリアに該当する。

川西地区に平等院（藤原頼通が永承7年[1052]に創立）、川東地区に宇治上神社と、平安期王朝文化を代表する建造物が存在する。宇治上神社の創建が頼通在世時であることが年輪年代法により近年明らかとなり、平安中期の平等院創立期からすでに対岸地域（川東地区）にも王朝文化が広がっていた。

史料によれば平安前期よりすでに別業が存在し、そのうちの一つが幾人かの手を経て、藤原道長に伝領（宇治別業）され、その後藤原頼通によって寺院化、平等院へと結実する。その後平等院には頼通一門により数多くの堂塔が造営され、同時に別業も築造されていった。中世期には一定程度の町屋が成立、また幾度もの戦乱の地となる。近世初頭には茶師の繁栄とともに発展を遂げたものと思われる。

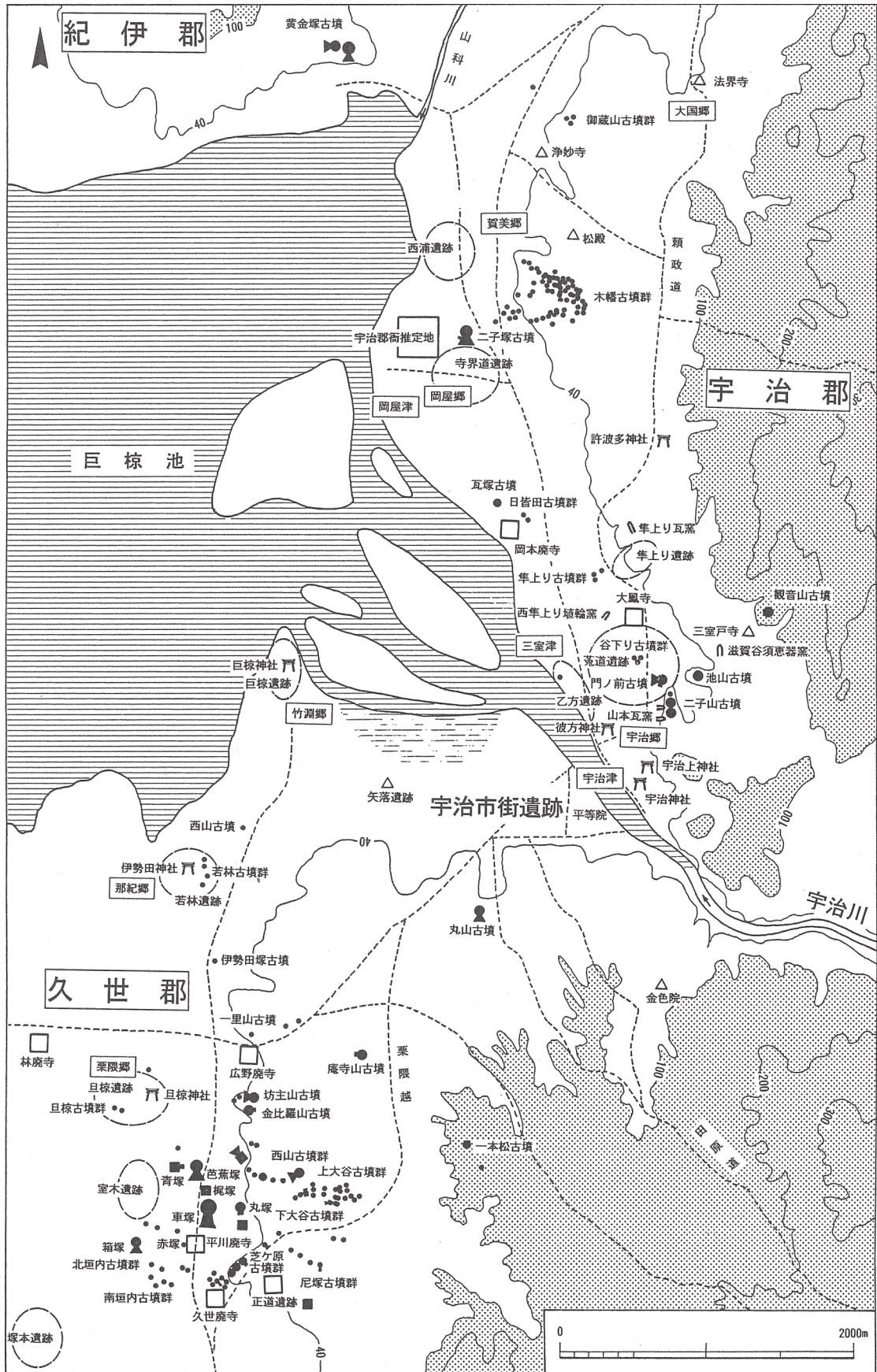
当該地の地形は、南側の丘陵から流下する折居川や塔ノ川などの小河川が形成した扇状地と宇治川が形成した河岸段丘とが複合したもので、その基盤となる土層（黄色砂層・砂礫層）の形成は、縄文後期以前とされる。当該地の最も広い範囲で沖積作用を及ぼした折居川の扇状地形成の終息は、古墳中期以降終末期までの間と考えられている。

### B. 宇治市街遺跡（川西地区）にみる平安時代

今回調査地を含む宇治市街遺跡（川西地区）ではこれまで本発掘・試掘調査等を含めると計25回程の発掘調査を実施しているが、平安時代に関する遺構・遺物の出土例は決して多くはない。いずれも調査面積が狭く、調査地ごとの遺構認識は点的理解というのが現状である。しかしながら12世紀（院政期）における景観のアウトラインは、現在一つの有力な解釈を得つつある。

JR宇治駅北の発掘調査（平成10年度）で、12世紀の東西道路側溝が確認された事が契機となってみえてきた。詳細な説明は省略するが、12世紀平等院西方（別業地区）には、碁盤目状の地割に基づく都市設計が施工されていた。今年度8月から11月にかけての宇治妙楽55番地の調査でもこれに続く東西道路の存在がうかがえ、より具体的となった。施工開始の時期については今のところ11世紀後半を想定している。藤原摂関家主導によりなされたことは間違いのないであろう。遺物的には平等院では康和3年（1101）の藤原忠実沙汰によって使用された河内向山系瓦の存在がある。この瓦は藤原摂関家との強い関係的特徴的に示すものと考えられ、宇治市街遺跡（川西地区）では概ね4町程度の広がりで見られる。

平等院創立前の状況は依然として判然としないが、前述の妙楽55番地の調査で平安前期の園池が確認された。実態として不明であった当該期の宇治を知る上で極めて重要な手がかりが得られた。



第6図 主要遺跡と古代の地形想定図

### 第Ⅲ章 検出遺構

今回の発掘調査で検出した遺構は非常に多く、時代的には概ね古墳時代中期から江戸時代まであり、その遺構の性格也多岐にわたる。現在「中宇治」と称される宇治の中心域で、これまでこれほど大規模な面積での発掘調査はなく、今回の検出遺構は数量もさることながら、重要な遺構が数多く存在すると理解される。それらの遺構をすべて報告することはできず、多くを将来的課題として残していくしかないが、その中から現時点で説明できうるもののみを今回は報告する。

なお今回検出した遺構で、韓式系土器が出土し、共伴して出土した木質の未製品から伐採年代が明らかとなり、注目を受けた SD302 についてはやや詳しく説明を行っておく。

前述したように廃土置き場の関係上、掘削は北（A 地区）と南（B 地区）と地区を二つにわけて廃土置場を反転しながらの掘削となった。遺構の密度は、宇治橋通り側の A 地区が B 地区よりも高いが、概ね江戸時代を主に時代的に新しい遺構が多いのが要因であろう。上層での攪拌が予想以上に酷く、調査面としては 2 面で実施した。現地表面から約 1.5 m 下で上面（江戸時代）、その 0.2 m 下で下面（古墳時代から室町時代）にかけてとなるが、上面との比高差はわずかで、上面でも下面の時期に含まれる遺構も多い。下面の遺構状況から判断すれば当時の地表面は江戸時代までにすでに削平を大きく受けていると考えられる。下面は概ね地山（黄褐色シルト層）を基盤とし、所々に整地土層らしき痕跡がうかがえるが厳密な把握はできていない。後述するように平安時代前期から後期にかけて貴族の邸宅が存在したと理解できる遺構が多数あり、当然必要に応じて整地土がなされたことは十分予測されることである。

**SD93** 南北方向と東西方向に延びる L 字型の石組溝。現存で約 4 m 続く南北方向の溝は、内側幅 0.3 m を測る。これに接続する東西方向の溝は上面に石を配し蓋をした構造をとる。江戸時代。

**SD140・195・97** 幅 0.4 ～ 0.5 m の南北に細長い溝。いずれも現状では途中でおさまり、それぞれ完結した溝にみられる。方位はほぼ同じで、時期は中世。中世宇治の地割を考える上でも参考になる溝であろう。これに直行する同一幅の東西溝に SD203 がある。

**SD262** 東西方向に延びる溝で、幅は形状が良く残る西側でみると約 1.3 m を測る。深さは 1 m である。東側では三時期の溝の輪郭が確認でき、掘りなおされたものと理解される。道路の側溝と考えられる。平安時代。

**SD268** SD262 と SD292 の間で検出された東西方向の溝。幅約 1 m を測る。SD262・292 と同じ方位を示す。時期は中世と近世の遺物が混じって出土し、特定は難しい。

**SD292** 東西方向に延びる溝だが、検出面辛うじて残っており、西側は途中で消えて痕跡が追えない。幅は 0.8 ～ 1 m を測り、深さは最も深い東端でも 0.1 m ほどしかない。SD262 とは幅と深さが異なるものの土地利用の在り方から一対になるものと考えられ、道路側溝と理解した。すなわちこの両者の溝の間が道路に相当する。道路幅は約 6.6 m を測る。平安時代。

**SD302** トレンチ北端部で検出した流路。流路は北西方向から南東方向をとり、検出長は、12 m、幅 2 ～ 4 m、深さ 0.4 m ～ 0.6 m を測る。幅は一定せず、北西部はやや湾曲気味に膨らむ。水は、埋土の堆積状況から東から西に向かって流れていたと考えられる。宇治市街遺跡の川西地区は、折居川の堆積作用によって南西から北東に傾斜しており、そのことを踏まえると水の流れは逆方向をとる。流路北肩にはほぼ全面に小礫が詰まっている。この小礫は地山層に下に潜り込んでおり、現時点では自然堆積とした方が無難であろう。埋土の堆積確認は、トレンチ東壁面と計 4 か所の断割で行った。

最下層は有機質土壌で東から西に向かって検出範囲の約3分の2まで広がっていた。その最下層の西側（下流側）で土器が一定のまとまりをもって検出された。層位的に子細にみれば、これらの土器がまず廃棄され、その後植物等の有機質がそれらにかかり始め流路が次第に澱み、有機質土壌が形成されたと理解される。その後も有機質土壌の堆積層で層位が形成される。土器は最上層では平安期の遺物と混在するが、それより下層は時代の異なる遺物が混在する状況は認めがたい。木製品や自然木の多くは最下層から多く出土する。土器の残りは非常に良く、直近からの廃棄で流路しか遺構としては確認できていないが居住空間が付近に存在していたことはほぼ間違いない。古墳時代。

**SD304** 北西-南東方向に延びる溝で検出長は14～15 mを測る。SG410を切っており、SG410の後に位置付けられる。平安時代。

**SD493** 層位的にみて大きく二段階にわけられる南北に細長い溝である。北側はトレンチ外へさらに延びるが、現存で約10.5 mを測る。溝は下層で幅0.4 m、上層の幅は約0.2 mを測る。下層で1か所、上層で4か所土師器がまとまっている地点が認められた。完形品がいくつか見受けられる。これと同一幅で方位を同じくする溝が、溝心々間の距離で西約6 mの地点で認められる。平安時代。

**SD495** 鍵の手状に折れ曲がる東西方向の溝で断面台形状を呈する。幅は2.5 m～3 mを測る。江戸時代。溝の南側斜面に木杭が三本確認できる。平安時代。

**SD496** U字状に湾曲する溝で東が狭く、西に向かって大きく広がり、また深くなる溝である。溝の南には不揃いな距離で木杭が数多くうちこまれている。平安時代。

**SE01** 方形木組井戸。縦方向に長い不揃いの板材を地面に突き刺し並べて井戸枠として組み立てたもの。底部には井戸枠板材を抑えるためにその板材内側に、正方形に組み合わせた角材がある。底部付近から木製の鋤先が出土。掘り方幅は約1.6 m、内側幅0.8 mを測る。一般的にみられる井戸の形状である。平安時代。

**SE14** 直径1 mの円形に石を組んだ井戸。一段組み。井戸以外の可能性もある。江戸時代。

**SE76** 方形を呈する石組井戸。直径1 mを測る。石を数段組む。方形の石組遺構はこれのみで性格は井戸以外の可能も考慮する必要がある。江戸時代。

**SE87** 直径1 mの円形を呈する石組井戸。石を数段組む。江戸時代

**SE218** 円形状に河原石を数段組んだ井戸で、石組の内側に底部のない大甕が石組に接するように内側に埋め込まれていた。検出時には甕はすでには破損した状態であった。検出面から深さ約0.5 mを測る。中世。

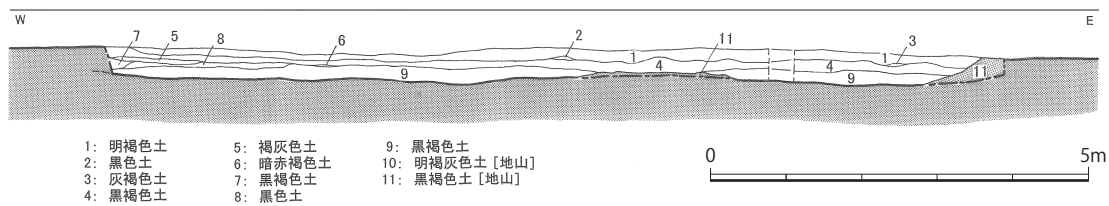
**SE252** 直径0.8 mの円形状に石を数段組んだ井戸。裏込めの石も密に埋め込まれ、今回検出の石組み井戸の中で最も丁寧に作られている。江戸時代。

**SE475** 河原石を円形状に数段組んだ井戸。内側直径は約0.5 mで東側のみ縦長板材で組む。深さは検出面から約0.4 mを測る。平安時代。

**SE476** 円形状に小ぶりの河原石を数段組んだ井戸。内側幅約1.1 m、検出面から深さ約0.5 mを測る。中世。

**SE589** 方形木組井戸。堀方幅は約1 m、上段部の内側幅は約0.6 m、下段部の内側幅は約0.5 mを測り、上段部の方がやや大きい。ヒノキ材の一枚板で各面を組み合わせ、上下二段で構成する。検出面から約1 mの深さで井戸底部には曲げ物が設置された、極めて良質な井戸である。平安時代。

**SG75** 園池の東端を確認した。底面は東から西に向かって緩やかに深くなるとともに、幅広くなり、確認できる範囲では南北幅5 mを測る。池の南側斜面に大ぶりの石が2つあり、景石と理解される。池中にある石も一つあり、景石の可能性はあるが元位置かどうかは判断できない。池の斜面にはその



第7図 SG494 土層断面図

他の痕跡は確認できない。埋土には大量の江戸時代の遺物が出土し、池の廃棄に伴い捨てられたようだ。江戸時代。

SG410・494 トレンチ東端で見つかった園池遺構で、いずれも東に向かって緩やかに傾斜する。

SG494 には礫が敷き詰められている。遺構の距離間は南北で約 20 m とあるが、遺構状況は非常に酷似し、同一遺構の可能性もある。園池は調査区東に大きく広がっていることが想定される。平安時代。

SG479 礫を敷き詰めた園池跡。園池は調査地外東・西いずれにも延びていくため、園池全体の広がり不明で、検出した比率はわからない。「へ」字状に湾曲する。北側に接続する幅 1 m 小さな玉石を敷き詰めた SD243 が存在し、池面の状況と合わせて SD243 は排水路で検出した園池部分は池尻と理解した。池の汀は小振りの彩色豊かな小礫を敷き詰め傾斜の緩やかな州浜を形成し、部分的に大振りの石を置く。水深は 15 ~ 20cm で浅い。平安時代。

SK12・03 直径 1.2 程の円形状の土坑で壁面に竹材を樽状に巻きつけたものがみられた。底面には幅 0.2 m 程の角材が一本、土坑の中心を通るように壁面と壁面をつなぐものがある。江戸時代。竹材を樽状に壁面に巻きつけた円形状の土坑は、同様の規模の土坑でいくつかみられた。

SK17・259・257・258 直径がいずれも 2.3 m と理解できる円形状の土坑で、ほぼ東西に並ぶ。同一性格の遺構と理解される。江戸時代。遺物で判断はできていないが、SK257 と重複する SK628 も同様のものと考えられる

SK37・67 楕円形状をした石組遺構で、石を数段組む。SK37 は長辺 1 m、短辺 0.7 m を測り、SK67 は長辺 0.7 m、短辺 0.5 m を測る。SK67 の西には SG75 があり、詳細な時期の特定はできないが園池付属の遺構かもしれない。いずれも江戸時代。

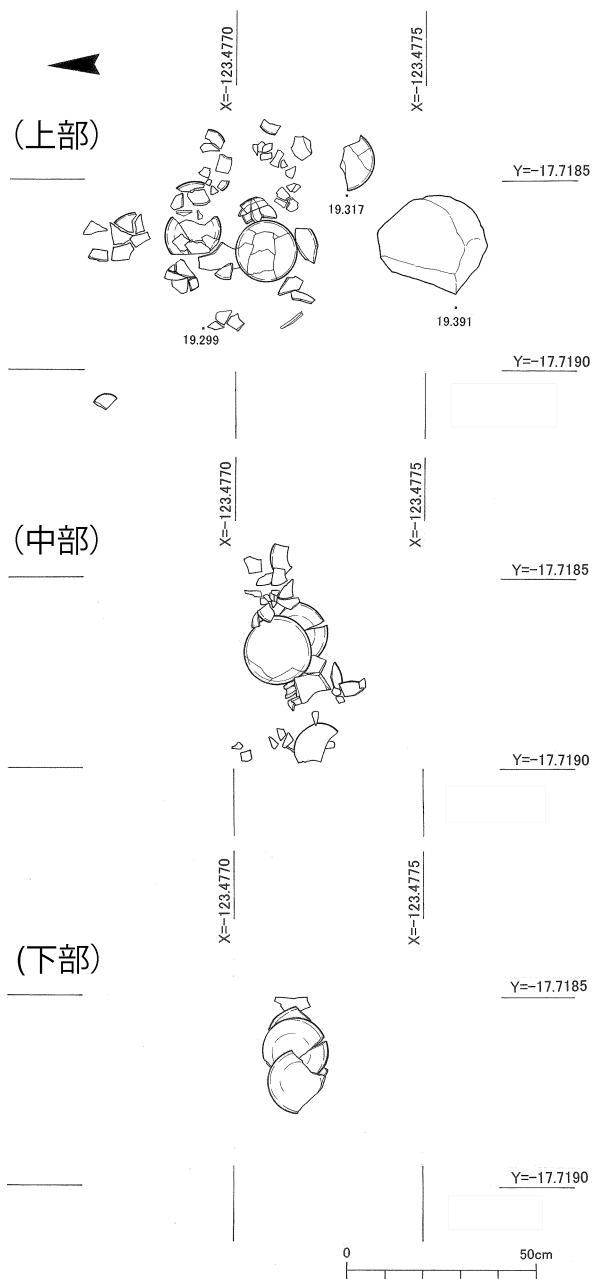
SK64 1.7 m を測る円形状土坑。深さは現存で 30cm。掘方はほぼ垂直に掘り込む。埋土は淡黄色砂層で真砂土状である。木簡は土坑中央に正位で垂直に立つ。文字面は真北から西に約 150 度振る。木簡下端部は土坑底部には密着せず、浮いていた。状況的には真砂土が入った後で木簡を突きさした可能性が高い。木簡下半部には固定の用途か、粘土塊が付着する。土坑内からその他の遺物はない。祭祀の類であろう。木簡銘から明治 40 年代のものと理解される。

SK396 遺構掘削時には一つの遺構として掘削を行ったが、土層断面図でみれば二つの土坑が一部重複して認められた。東側の土坑で土師器とともに大量の箸を始めとする木製品類が下層から出土した。土坑は幅約 2 m、深さは 0.3 m を測る。貴重な遺構である。平安時代。

SP49 直径 0.4 m 程を有する角柱が一本独立した状態で出土した。角材は四隅に面取りを有する。角材の大きさに見合わない大きな土坑に埋め込まれていた。平安時代。

SP533 地中に石を埋めて柱の土台とするもので、礎石には墨書が書かれている。

SX181 河原石を円形状に組んだ井戸状遺構である。中央部は石組よりもさらにくぼむ。掘り方は約 1.4 m、内則直径は約 0.7 m を測る。底面まで検出面から約 0.4 m。平安時代もしくは中世でも早い



第8図 SX607 平面実測図

古墳時代：SD302

平安時代：SD42・SD43・SD202・SD243・SD251・SD261・SD262・SD292・SD304・SD493・SD495・SD496・SD499・SD587・SE01・SE475・SE589・SG410・SG479・SG494・SK88・SK132・SK260・SK375・SK395・SK396・SK575・SP24・SP32・SP33・SP46・SP49・SP50・SP52・SP54・SP63・SP65・SP69・SP71・SP72・SP73・SP79・SP82・SP94・SP95・SP96・SP99・SP100・SP103・SP120・SP121・SP122・SP123・SP135・SP136・SP141・SP143・SP144・SP160・SP170・SP176・SP177・SP187・SP193・SP204・SP207・SP212・SP216・SP217・SP220・SP224・SP226・SP231・SP233・SP234・SP249・SP250・SP305・SP306・SP323・SP327・SP343・SP345・SP347・

時期か。

**SX607** トンチ南東部で検出された土師器溜まり。遺構の輪郭はつかめなかったが、土師器が上下に重なって出土しており、土坑内に廃棄された可能性がある。大きく三段階（上部・中部・下部）にわけて遺物を取り上げた。いずれも完形品と破片で構成され、それぞれ特段の変化は認められない。平安時代。

最後に建物について触れておきたい。礎石と掘立柱穴いずれも数多く確認でき、いずれかの建物が存在したことは明らかになったものの、建物の詳細な状況はつかめていない。礎石を伴う柱穴はSG479の南側に集中して出土し、ここに礎石建物が存在していたことがわかる。時期の特定は難しいが平安時代のもものとみて間違いなからう。掘立柱穴についてはSD495からSD304の広範囲に広がっており、出土遺物の状況からも平安時代から中世にかけて比較的長期にわたって掘立柱穴建物が存在していたと理解される。

なお遺構の時期的選別の可能なものについては先述したものを含め下記に示した通りである。重要な平安時代の遺構の年代については遺物の項を参照されたい。

- SP349・SP356・SP388・SP389・SP390・SP391・SP398・SP412・SP434・SP318・  
 SP351・SP406・SP408・SP448・SP455・SP484・SP523・SP542・SP545・SP546・  
 SP547・SP562・SP564・P577・SP581・SP586・SP590・SP619・SP642・SX175・  
 SX181・SX607
- 中 世：SD97・SD140・SD195・SD203・SD211・SD268・SD514・SD538・SE49・SE218  
 SE476・SK154・SK192・SK218・SK219・SK439・SK516・SP21・SP23・SP25・  
 SP27・SP29・SP39・SP40・SP51・SP56・SP108・SP113・SP118・SP119・SP124・  
 SP148・SP158・SP178・SP189・SP190・SP239・SP244・SP247・SP255・SP350・  
 SP359・SP370・SP413・SP440・SP459・SP488・SP489・SP491・SP574・SP578・  
 SP611・SP619
- 近 世：SD07・SD93・SD265・SD496・SD526・SE14・SE76・SE87・SE252・SE352・SG75・  
 SK02・SK03・SK12・SK16・SK17・SK18・SK19・SK37・SK67・SK77・SK90・SK91・  
 SK92・SK117・SK130・SK131・SK153・SK257・SK258・SK259・SK628・SP11・  
 SP49・SP55・SP57・SP58・SP59・SP78・SP80・SP81・SP84・SP127・SP150・  
 SP157・SP178・SP182・SP214・SP291・SP366・SP441・SP474・SP502・SP574  
 SP588・SP594・SX38・SX397
- 近 代：SK64

## 第IV章 出土遺物

今回出土した遺物はコンテナに200箱程度である。出土遺構の選択基準は、平安期を優先的に選択した。それは藤原頼通の平等院に代表されるように、宇治市域の地域史を考察する上で、平安期の遺構は欠くことのできないものであると認識しているからである。結果、宇治妙楽55番地における全体の時代変遷を提示することが出来ず、一時期に限定されることは否めない。ここでは土器類と木製品・有機物について説明し、瓦については平安期の軒瓦のみを図面・写真・表に掲載した。11・12世紀のものがあるがそれ以前の瓦は出土していない。また、石製品については、第9図・写真・表に掲載した。

### 土器類

宇治市域において出土する土器は、地理的にも平安京に近い距離に位置していることから、京域資料と類似していることが過去の研究からも指摘されている。その中でようやく中井淳史氏が、宇治市域における土器編年を提示された。(中井2004)氏は、京域資料・瓦器塚との共伴関係を元に、宇治市域における編年を提示されている。大規模な調査が行われた近年、その先駆けとなった当該地では平安期の良好な資料が検出され、宇治地域における土器様相について、提示に耐えられる情報は蓄積されてきた。そこで、当該地の土器様相を、平安期を中心にして過去の調査資料と比較しながら提示していきたい。当該地で出土した遺構は、古くは古墳時代中期の5世紀から始まり、平安後期が最も多く、その後、中世は減少し、近世になってまた増加するという漠然とした変遷がうかがえる。遺構としては、平安前期以前にさかのぼるものはSD302以外に認められない。しかし奈良時代の杯A・

B がごくわずかに見られることから、古墳時代から平安時代前期までの間に何らかの痕跡はあったものと考えられる。平安期になり、藤原氏の台頭によって、平等院に代表されるような別業地に利用され始めることで、宇治市域の土地利用が最盛期を迎える。今回の調査で、平等院創建前の良好な資料を検出することができ、別業前の景観を復元できる大きな成果を得ることができた。本来は全時代を通じた編年を提示すべきだが、平等院創建前から鎌倉期におけるまとまった資料を提示し、整理することで、当該地を評価していきたい。そして、今回の提示を元にして、今後の宇治市域の土器編年につながるきっかけとして評価してもらいたい。比較する資料は一括性の高い資料を使用するが、誤解を招く恐れがあるため、その際は一括性の低い二次堆積を参考程度に使用する。また、京域比較資料として、小森俊寛 2005『京（みやこ）から出土する土器の編年的研究』を使用する。

以下、古相の遺物から遺構単位で報告する。

**SD302** 総数 231 点に及ぶ古墳時代中期の土器が出土している。その内訳は初期須恵器・陶質土器 26 点 (12%)、軟質土器 (韓式系軟質土器) 70 点 (30%)、土師器 135 点 (58%) である。以下、出土土器のうち図化した個体 155 点について報告する。

**初期須恵器・陶質土器** 初期須恵器・陶質土器は蓋 (1・2・11)、有蓋高坏 (12・13)、無蓋高坏 (17～19)、高坏脚部 (14～16・20)、把手付碗 (3)、小型筒形器台 (4)、甕または小型壺 (5～10)、高坏形器台 (21～23)、甕 (24～28)、壺 (29～31) が出土している。

1・2 は蓋である。天井部中央につまみを有し、平坦な天井部に櫛描直線文と刺突文を交互に 2 段巡らせる。天井部と口縁部の境には鋭く張り出した稜をもつ。口縁端部は面をもち、沈線を加えることにより段を形成する。11 は 1・2 とは異なり、天井部に凸線と断面四角形の刺突文を放射状に巡らせる。

12・13 は脚部まで残存しないが、底部へのヘラケズリが無いことから有蓋高坏の坏部として判断した。たちあがり部は内傾し、端部は丸くおさめる。受け部は長く水平に伸びる形状である。無蓋高坏 (17～19) は坏部の形状がそれぞれ異なる。17 は坏部が丸みをもって内湾し、坏部上半に稜をもち直立する。18 は丸みをもって内湾し、そのまま上方へ広がる坏部をもつ。19 はほぼ完形で、丸みをもって内湾する坏部下半から外反する坏部上半をもつものである。脚柱部中程を凸線で区画し、上下 2 段に断面三角形の工具による刺突を 5 方向に施す。本来、三角形の刺突については、半貫通するものであったと考えられるが、ここでは貫通している。裾部は脚柱部からゆるやかに開く。14 は脚柱部中程と裾部との境界を凸線で 3 段に区画し、櫛歯状の工具による刺突を脚柱部の上下 2 段に施す。20 も 14 と同様に凸線で区画し、刺突文を施すが工具は板状で先端に刻み目をもつものである。15 は高坏裾部片であり、裾部に凸線を巡らせ区画する。裾部端部は明確な面をもつ。16 は裾部を拡張させ明確な端面を作る。

3 は把手付碗の体部片である。外面は口縁部下と体部中程に凸線を巡らすことで区画し、区画内に波状文を施す。底部は平底と考えられる。

4 は小型の筒形器台である。管見では、日本列島や朝鮮半島での類例は存在しない。受部は筒部から内湾気味に広がり、筒部と脚台部の境には外側へ張り出す段をもつ。丸みを帯びた凸線により、受部と筒部の境界に 1 段、筒部に 3 段、脚台部に 2 段の区画がおこなわれ、縦方向 1 列に上下 4 段、6 方向の三角形の透かし窓を穿つ。透かし窓は、ヘラ状の刀子により内面から開けられたと考えられる。受部外面には櫛歯状の原体により縦位方向の刺突文を巡らせる。

5～10 は甕または小壺であり、口頸部の形状や、円孔の位置などに個体差が顕著である。6 は頸部が比較的太く直立気味に外反し、直立気味の有段口縁部へと至る。体部中程に円孔を穿つ。底部は

絞り込み技法により閉塞する。8は頸部が強く外反し、有段口縁部の屈曲点に凸線を巡らせる。肩部の上位に斜め上から円孔を穿つ。9・10は頸部がしまった形態をもつ。

21は高坏形器台の坏部であり、口径は28.4cmである。全体に丸みをもち、坏部は深い。坏部端部は短く外反し端部を丸くおさめる。坏部外面は凸線により4段に区画した後、上から山形の刺突文、細条のヘラ描線鋸歯文、ヘラ描山形文、T字状の横位方向と縦位方向の刺突文を施す。22は高坏形器台の基部である。凸線に区画され、櫛描波状文を施した後に三角形の透かし窓を3方向に穿つものである。基部はややしまった形状に復元できる。23は高坏形器台の裾部である。外面に2条1対の凸線を巡らせ区画した後、三角形の透かし窓を千鳥状に穿つ。裾端部は外側に面をもちおわる。

27は中型の甕の底部で平底を呈し、外面調整は体部から底部に平行タタキを施す。内面調整はナデによる。28は中型の甕の体部～底部片である。外面調整は平行タタキを丁寧にナデ消し、内面調整はナデ。底部と胴部の境界に対応する接合痕の上下で胎土の色調が異なる。29は直口壺の口縁部であり、外面に2条の凸線を巡らせる。30は壺頸部片、31は壺の底部から体部で底部側面に円形の打ち欠きがなされる。内外面調整は共にナデを施す。

**軟質土器（韓式系軟質土器）** 軟質土器は平底鉢（32～56）、埴（71）、甗（61～63・69・70）、把手（64～66）、長胴甕（72～74）、盤もしくは浅鉢（75）、埴（76）、小型甕（77）が出土している。

32～56は平底鉢である。軟質土器の中では最も出土数が多い器種であり、体部外面にはスガ、口縁部内面にコゲが厚く付着する個体が多く、複数回にわたって繰り返し使用されたことがうかがわれる。また、口縁部径や器高から平底鉢には小型品・中型品・大型品といった法量区分が認められる。32・33・41・50は口縁部径11.6～13.4cm程度で小型品、34～36・39・40・42・43は口縁部径14.0～16.0cm程度で中型品であり、44・45・51～56は口縁部径16.6～19.8cm程度の大型品で、中型品よりも口縁部の反りが大きい。口縁端部は丸くおさめるものや外側に面をもっておわるものが存在する。体部は肩がやや張り出すもの（35・36・39・40・55）と、肩部があまり張り出さないもの（32・33・50）の両者が存在する。外面調整は縄蓆文タタキ、格子目タタキを施すものや、39のように無文タタキを施すもの、40・54・55のようにタタキをナデ消すものも確認できる。底部外面にはナデ調整後ヘラケズリをおこなう。内面調整は全てナデによる。大量の平底鉢の出土、複数の法量区分の存在や無文タタキの使用は、他の集落遺跡では見られず特徴的な事例である。

57～60は口縁部径から鍋もしくは甗の口縁部と考えられる。外面調整は縄蓆文タタキ、格子目タタキの両者が存在し、口縁部は外側に面を作る。61～63は甗の底部である。62は蒸気孔が確認できる。64～66は甗の把手である。把手はやや短く、端部の調整から先端部を切り落としている。出土した個体には上部の切り込みは見受けられない。70は甗であり、全形の2分の1程が残存している。口縁部径は23.8cm、器高は23.5cmである。口縁部は短く外反し、体部最大径に対して器高がやや短く、口縁部が外反する特徴と共に類例が少ない。外面調整は口縁部にヨコナデ、体部上半部に縄蓆文タタキを施し、下半部はヨコナデ、底部はヘラケズリをおこなう。底部外面には2個1対のユビオサエが巡る。把手は内側から差し込む事によって取り付け。把手下端には棒状の刺突痕が見られ、乾燥時の支持具の痕跡と考えられる。内面調整は口縁部にヨコナデ、体部は縦方向のナデ、底部はヨコナデをおこなう。蒸気孔は中央の直径3.0cm程度の円孔の周囲に、直径1.5cmの円孔8個を設ける。

71は埴である。「く」の字に外反する口縁部をもち、口縁端部は外側に面を作り上方に摘み上げる。外面調整は口縁部にヨコナデを施す、体部には平行タタキを施した後に平行沈線を2条巡らせる。平行沈線は把手を付加する際の高さを示していることから、把手があるものと思われる。

72・73は甗と組み合う器種である長胴甕の口縁部である。短く外反する口縁部をもち、端部は丸

くおさめる。外面調整は72は格子目タタキ、73はヨコハケを施す。73は焼成がやや甘く、色調も他の軟質土器と異なるため、土師器の技法で製作された可能性が高い。74は長胴甕の底部である。外面調整は縄蓆文タタキ、内面調整はナデによる。外面にはススが厚く付着するのに対し、内面にはコゲが付着しない。こうした使用痕は、甕と組み合わせて用いるという長胴甕の使用方法を忠実に示している。

75は口縁部に注口を有する平底の底部で、盤もしくは浅鉢として考えられる。76は口縁部を外反させる堦である。77は小型の丸底甕で、外面調整は粗いタテハケ、内面調整はナデによる。口縁部は内湾し、端部は上方に内傾する面をもつ。底部は痕跡的な平底をもつ。体部外面にススが、口縁部内面に厚いコゲが付着し、平底鉢と同様の使用痕をもつ。使用痕、法量から、平底鉢を土師器の製作技法を用いて模倣したものと考えられる。

土師器 中型直口壺(78～86)、中型広口壺(87～89) 小型丸底壺(90～92)、大型壺(93～95)、大型直口壺(96)、大型広口壺(97)、複合口縁甕(98・99)、「く」の字状口縁甕(100～112)、製塩土器(113・114)、台付甕(115)、高坏(116～155)が出土している。

78～86は中型直口壺で、頸部から直線的に広がる口縁部をもち、端部は尖らせておわるものである。外面調整はタテハケ後ナデを施すもの(78・84)と、丁寧なナデを施すもの(79・83・85)が存在する。80は胴部外面にヨコハケ調整を施し、頸部内面には指紋が顕著に観察できるユビオサエがみられる。85・86は胎土中に砂礫をほとんど含まず、丁寧なナデを施す精製品である。

87～89は中型広口壺で、頸部から短く外反する口縁部をもつ。外面調整は粗いハケが目立つ。87は口縁部外面にヘラによる押圧を施し、頸部内外面にユビオサエがみられる。90～92は小型丸底壺である。90の調整は底部外面にハケ、底部内面にヘラケズリを施す。91は胎土が精良で丁寧なナデ調整を施す。92は底部外面にヘラケズリを施す。

94・95は大型壺の頸部と底部であり、胎土や出土位置から同一個体の可能性が高い。頸部には断面三角形の突帯を貼り付ける。底部の内外面調整は細条のナメハケによる。底部は直径6cmほどの平底をもつ。96は大型の直口壺である。口縁部は直線的に開き、端部は内側に肥厚する。外面調整は口縁部にヨコナデ、肩部にはヨコハケ、胴部～底部にかけてタテハケを施す。ハケメについては細条のもので、他の土師器に施されるものとは異なる。内面調整は口縁部にタテハケのちナデ、体部上半はヘラケズリ、体部下半は拳先の押捺を施す。器面にはスス、コゲが付着し甕と同様の調理がおこなわれたと考えられる。97は「く」の字に外反する口縁部をもつ大型の広口壺である。外面調整は口縁部タテハケのちヨコナデ、体部は部分的に粗いタテハケ調整をおこなう。98・99は複合口縁部をもつ甕である。山陰地域に系譜をもつものであるが、布留式後半期には近畿地方の在地の土器組成に定着する。99の複合口縁部の段は不明瞭であり、約4mm程度の幅の凹線を施す事により、段を強調する。外面調整は口縁部にヨコナデ、肩部には断続的な短いヨコハケ、体部下半部には粗いタテハケ調整をおこなう。内面調整は口縁部ヨコナデ、体部上半にはヘラケズリ、下半部はヘラケズリ工具の先端によって生じる擦痕と、拳先の関節による圧痕が明瞭に観察できる。

100～112は「く」の字状口縁甕である。口縁部は外反するもの(100～102・105～107・111・112)と口縁部が直立するもの(108)、内湾するもの(103・104・109・110)の三者が存在する。口縁部が内湾するものについては布留形甕の系譜を引くものであり、口縁端部の形状は端部をわずかに肥厚させるもの(103・110)や、丸くおさめるもの(104)、面をもつもの(109)などがある。一方、外反する口縁部をもつものについては、口縁部の長さや細部の形状に個体差が顕著にみられる。外面調整については、布留形甕に特徴的な肩部ヨコハケは失われ、タテハケのみのもや肩部に断続的な

ナメハケを施す個体が多い。またハケメが粗いものが大半を占め、一部の個体（102・103・111）に細条のハケメが施されるのみである。内面調整は口縁部にハケ調整を残すものが多く、体部には単位の明瞭なナデを施すものや、浅いヘラケズリを施すものの二者が存在する。

113・114 は製塩土器と分類したが、製塩土器特有の二次焼成は見られず、器壁も厚いことからその用途は不明である。外面調整は縦方向にケズリ上げる。内面調整はヘラケズリとナデを施す。口縁部上端には草本類による圧痕が観察できる。115 は東海地域を中心に分布する台付甕であるが、在地の土器の胎土とは異なり、胎土中に金雲母を多量に含む。搬入品である。外面調整は一次調整ヘラケズリの後、二次調整にタテハケを施す。

116～121・123・125 は無稜外反高坏であり、坏底部から内湾気味にたちあがり、端部付近で屈曲し外反する坏部をもつ。坏底部と坏部上半との境界に明確な稜がみられないものである。外面調整はタテハケのちヨコナデを施す。122・124・126・133・135 は浅い碗状の坏部をもつ碗形高坏である。いずれも浅く半球形の坏部のものはない。坏底部から坏部上半にかけて内湾気味にたちあがり開く形状をもつ。外面調整はタテハケの後にヨコナデを施す。127～132・134 は有稜高坏で、坏底部と坏部上半との境界に明確な稜がみられる。坏底部は水平に伸び、器壁は他の高坏よりも厚い。内外面調整ともにヨコナデを施す。いずれも中型品であり、大型品はない。136～155 は高坏脚部である。144 は裾部径が 15.5 cm と他の脚部よりも大きく大型高坏の脚部と考えられる。150 は小型の高坏であり透孔を 3 方向に穿つ。その他の脚部に関しては、裾部径は 9.3 cm～12.9 cm の間におさまる規格性が高い。高坏脚部に透孔をもつものは 139・150 のみである。外面調整は縦方向のヘラナデを脚柱部に施し面取りをおこなう。

また、坏部と脚部の接合方法については次のように複数の方法がみられる。a 類：脚部から坏底部まで連続的に成形し、坏部完成後に角栓状の粘土塊を充填するもの（122・126）、b 類：坏底部に凸面状に閉じた脚頂部を挿入するもの（116・132～136・140・147）、c 類：坏底部に中空の脚頂部を挿入し、中空部に角栓状の粘土塊を充填するもの（127～129・137・150）である。また細部の製作技法としては充填された粘土塊に脚部内面から棒状の刺突をおこなうもの（134・135）や、脚頂部に刻みを施すことにより接合を強化しているもの（136）が存在する。

以上のように、SD302 から初期須恵器・陶質土器と軟質土器の大量の出土が認められた。こうした状況は、大阪府長原遺跡東部地区周辺や陶邑窯跡群周辺の工人集落でも認められ、宇治市街遺跡の周辺にも多くの渡来人が存在した可能性が高い。出土初期須恵器・陶質土器は大阪府大庭寺遺跡 TG232・TG231 号窯出土土器に類似し、近接した時期のものとみられる。多種多様な器種構成や使用痕の共通性、法量区分の存在からもこれを裏付ける。一方、これらの初期須恵器・陶質土器は個体差や変容差が大きく、初期須恵器・陶質土器の時期決定は慎重に行うべきである。このため、土師器の相対編年のどの段階に共伴するかは、碗形高坏の坏部の形態変化や有稜高坏の大型品の出現時期などから考える必要がある。現状では TK73 型式以降の半球形の碗形高坏や大型有稜高坏が存在せず、土師器からも TG232 型式期に併行すると考える妥当性が高い。

**SD495** 土師器皿・瓦器碗・黒色土器・瓦・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・土師質羽釜などがコンテナに 10 箱出土。層序は概ね三層に分層可能であったが、層序による型式変化は窺えず、むしろ様々な時期の遺物が層序関係なく混在しているという状況である。下層（157）・中層（158～166）・上層（167～175）が出土。いわゆる「て」の字形口縁を有する皿は 10 世紀後半～11 世紀前葉（167）の薄手もあれば、厚手化した 11 世紀中葉～12 世紀初頭（158・159）の器形も見られる。大皿・小皿でも 2 時期あり、古相（162・163）のものや、新相（160・165・168）では外反する二段ナデがあ

る。157・161は10世紀前半の様相で、古相が窺える。164は摂津系の土師質羽釜。砂粒を多く含む。灰白色。166・171～173は灰釉陶器。166は稜皿。貼り付け高台。171は碗で、三角高台を有する。173は碗の高台部。底部外面に「筑」の墨書を施す。いずれも10世紀後半から11世紀初頭。169は緑釉陶器高台部。削り出し高台。須恵質。170は土師質の緑釉陶器。貼り付け高台。胎土は淡褐色。174は黒色土器A類碗の高台部。見込みに隙間のないミガキを施す。高台は高い。貼り付け高台。10世紀後半～11世紀初頭。176は瓦器碗。削り出し高台で、広義の瓦器碗の製作技法とは異なるものである。内外面にミガキを施し、底部外面には線刻を施す。胎土は灰白色、焼成は硬質。管見の限り、宇治地域においてこのような類例は見られず、年代特定は今後の検討としておきたい。175は黒色土器A類の甕。外面は煤が付着し、ミガキが見られる。内面はヨコハケによる調整が見られる。10世紀後半～11世紀前半頃か。177は緑釉陶器の高台部か。高台と思われる部位は貼り付けている。胎土は土師質で、淡褐色。底部外面は糸切り痕が見られ、見込みにも糸切り痕が残る。

時期幅は、概ね10世紀後半～11世紀初頭、11世紀中葉～11世紀後葉の二時期が多く見られ、中心の時期を占める。また、10世紀前半頃の古相の一群がわずかに見られるという解釈が与えられる。

**SG479** 土師器皿・須恵器・瓦・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦器碗・黒色土器・木製品などがコンテナに15箱出土。池底面（178～182）、池埋土（183～208）、池廃絶後の層（209～213）、断割（214～216）から出土。土師器皿はいずれも手づくね。178は土師器皿。外反する体部に口縁端部は内へ内傾する。褐色。9世紀末～10世紀前半頃。179は土師器皿。「て」の字形口縁を有する。端部のつまみ上げが明瞭に見られる。10世紀後半～11世紀前葉。180は土師器皿。体部が外反し、口縁端部はかなり曖昧であるが上方に伸びている。赤褐色。181・182は黒色土器A類の高台部。いずれも内面には密なミガキを施す。10世紀前半。183～187は概ねIV新～V古に収まる土器群。184～186は外反する二段ナデを有する中皿（184）と大皿（185・186）。いずれも11世紀後半頃。187は口縁端部の外反がなくなり、端部はやや直立気味で12世紀的な形態をなす。混入の可能性も考えておきたい。183は口縁の成形が曖昧になり、厚手化している。188～193は「て」の字形口縁を有する皿。口径10.0～14.0cmまで見られ、概ね大型と小型の二法量が見られる。10世紀後半～11世紀前葉。194・195はやや古相。外反する口縁に端部を上方につまみ上げている。195は体部外面の窪みが顕著である。いずれも内面にハケ目を残す。196～200は黒色土器A類の碗。いずれも貼り付け高台。196は内面は密なミガキ、外面・底部外面も幅の広いミガキが施される。貼り付け高台。197・198はやや小型化した碗の高台部。197は砂粒を多く含み、底部はかなりの厚手である。198は高台が高い。赤みがかった胎土に内外面を密に磨く。199は小鉢。内面は密・外面は粗いミガキを施す。200は高台部。高台が高くなり、黒色土器の中でも新相のものである。196～198は9世紀末～10世紀前半で、199・200は10世紀後半～11世紀前葉に位置付けられる。201は高杯の脚部。淡赤褐色を呈し、六角形に面取りを施す。202は灰釉陶器皿。高台は方形をなす。口縁端部は外に外反する。9世紀末～10世紀前半。203は須恵器杯Bの高台部。7世紀末から8世紀前半頃か。204は須恵器鉢の底部。白色を呈す。篠窯産。11世紀中葉～11世紀後葉。205～207は緑釉陶器。205は土師質の胎土を有する。釉薬は薄い緑色を呈する。206は碗の高台部。削り出し高台。胎土は須恵質。207は耳皿。底部は平高台で、糸切り痕が残る。胎土は土師質。釉は見込みに僅かに残る程度である。いずれも9世紀末～10世紀前半のものと考えられる。208は東播系の須恵器鉢。209～212は土師器皿。209は砂粒を多く含み、体部が外に開き気味である。210は淡褐色。1個体の中で一段と二段ナデの両方が見られる。12世紀代。211は淡橙色。口縁部はやや直立気味である。ナデ幅が短い。12世紀前半。212は土師器台付皿。11世紀後半頃か。213は白磁碗の高台部。214は土師器台付皿。「て」

の字形口縁の器形を呈する。215・216は高杯の脚部。215は淡褐色を呈し、10面以上面取りをしている。216は淡い赤褐色を呈し、円形を呈する。外面には細い削りがみられる。

SG479を通覧すると、概ね9世紀末～10世紀前半、10世紀後半～11世紀前葉、11世紀中葉～11世紀後葉の三つの時期が見られ、特に10世紀後半以降の遺物が多くみられ、これは池が存続していた時期であると考えられる。古相の一群はSG479開削に限りなく近い時期を示せる可能性がある。

**SG494** 土師器皿・須恵器・瓦・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦器碗・黒色土器・木製品などがコンテナに10箱出土。礫敷底面では217～219が、埋土では220～240が出土。217は二段ナデを有する皿で、口縁端部が若干起き始めている。12世紀初頭ごろと考えられる。218は黒色土器A類碗の高台部。見込み・底部外面にミガキを施す。219は黒色土器B類碗の高台部。見込みと底部外面に密なミガキを施す。220～224は「て」の字形口縁を有する皿。古相(221・222)と新相(220・223・224)の二時期が見られる。225はやや外反する二段ナデの小皿。226は外に開き気味の二段ナデを有する大皿。口縁端部は外反せず、面取りのような調整がされているが、体部は開き気味で、12世紀後半以降に見られる体部の形状と異なる。227は外反する二段ナデを有する大皿。228～230は前者よりはやや薄手である。在地の可能性が考えられる。233～235は灰釉陶器。233は段皿。口縁内面から口縁外面に施釉する。口縁端部の四方向に、ユビによるオサエが窺え、おそらく輪花を模倣したものと考えられる。235は深碗。236は土師器台付皿の高台部。237は越州窯の青磁碗。見込みに毛彫りの文様を施す。238は瓦器皿。内外面、底部外面に密なミガキを施す。SG410より薄手である。239は東播系の鉢。240は灰釉の花瓶か。体部をはけ塗りする。231・232は瓦器碗。いずれも内外面に密なミガキを施す。232は隙間がなく、分割性が認められる。古相の一群も見られるが、礫敷底面に新相の217が出土していることから、概ね12世紀初頭を下限として年代を与えておきたい。

**SX607** 土師器皿・瓦がコンテナ1箱出土。241は「て」の字形口縁を有する皿。242～249は外反する二段ナデの大皿。いずれも口縁端部を外に出す。246は端部の外反が緩くやや新相と思われるが、出土状況から型式の異なる遺物が混入するとは考えにくい。概ね同時期の遺物と考えている。法量は241は10.1cm、大皿は14.3～15.8cm。249は内面にドーナツ状の煤が付着する。244・248は口縁の広範囲に煤が付着する。平等院出土遺物より薄手である。IV中頃。11世紀中葉。

**SD304** 土師器・瓦器碗などがコンテナに1箱出土。250はコースター形。底部外面にナデが及ぶ。251は「て」の字型口縁を有する皿。口縁の成形が曖昧なものになってきている。252は小皿。二段ナデを有する。253・254は大皿。一段ナデで、深手である。255・256は瓦器碗。256はミガキの幅が大きく、和泉型と捉えている。12世紀前半。

**SG410** 土師器皿・瓦・瓦器・貿易陶磁器類がコンテナに3箱出土。257～259は「て」の字形口縁を有する皿。前段階より器壁が肥厚し、形態も曖昧なものになる。258・259は器形の退化が著しい。口径9.6～10.2cmに見られる。260～263は小皿。いずれも淡赤褐色から淡褐色を呈する。一段ナデであり、やや平らな底部に外に開き気味のまっすぐな体部が付す。264は土師器台付皿の高台部。265～267は大皿。265は丸みのある形に二段ナデを施し、口縁端部がやや直立気味で、若干外反している。266は一段ナデを有し、深みを帯びる。267は外反気味の二段ナデの口縁を有する。口縁端部が起きてきておらず、若干古相の様子が窺える。小皿は口径9.8～11.1cm、大皿は14.0～16.0cmに見られる。中皿に関しては、いずれも細片のため図化することができなかったが、一定量出土している。268はロクロ土師器。底部に糸切痕が残る。269は瓦器碗。口径14.0cm。内外面ともに密なミガキを施し、見込みにはジグザグ状の暗文を施す。270・271は瓦器皿。口径9.4～9.7cmに見られる。いずれも内外面に密なミガキを施す。見込みにはジグザグ状の暗文を施す。270は底部

外面にもミガキを施す。272は白磁碗の高台部。「て」の字形の小皿の器形がかなり崩れていることや、大皿では口縁端部が直立し始めていることから、概ねV古～V中に相当し、11世紀末～12世紀前半と考えられる。

**SE01** 土師器皿・瓦器・瓦・貿易陶磁器類・須恵器などがコンテナに5箱出土。遺物は掘方と埋土から出土した。堀方は273・274が出土し、褐色で外反が曖昧になった二段ナデを有する。273は口縁内面にナデによる窪みが見られる。埋土は275～291が出土。小皿・大皿の二法量に分化できる。小皿の法量は9.3～10.6cmに見られ、京域より厚手である。275・276は口縁端部を方形におさめる。小皿は外反する意識は持っているが、端部の処理が曖昧である。体部の開きが平等院より狭くなっている。280は土師器台付皿の高台部。外面全体に煤が付着する。281・282は二段ナデを有する大皿で、淡褐色を呈する。概ね15.0cm台におさまる。283は瓦器小碗。最下層から出土した。表面の剥離が顕著である。外面のミガキは認められない。284～287は瓦器碗。285は体部上半をやや直立気味におさめる。内外面共にミガキが密で、体部下半まで磨く。286は体部上半がやや開き気味。ミガキの状態は285に近い。287は内面のミガキは密。外面は若干隙間が窺えるが、体部下半までミガキが見られることから、285・286と大きな齟齬はないと捉える。288は白磁碗の口縁部。乳白色。289は大和型羽釜の口縁部。290は須恵器鉢の底部。底部外面に糸切り痕が残る。291は須恵器鉢。体部中央付近の器壁が薄い。口縁端部は方形におさめる。暗青灰色。また、図化していないが、「て」の字形口縁を有する土師器皿も出土している。概ねV古～V中に幅を持たせておきたい。12世紀初頭。

**SP79** 292～295はいずれも手づくねの土師器皿。二段ナデを施す。口縁短部は直立し始めている。口縁のナデの力により、口縁内面が窪む。底部外面の押圧が顕著。胎土はいずれも精良な灰白色を呈する。口縁部に煤が付着している。V古～V中的。12世紀中頃。

**SD261** 土師器皿(296～298)が出土している。

**SD262** 土師器皿・瓦・瓦器碗・須恵器・木製品などがコンテナに5箱出土。299～301は土師器皿。土師器皿の器形は京域資料と異なる。302は土師器台付皿の高台部。脚部のユビオサエが顕著。303は瓦器碗。直立する口縁を有する。内面のミガキは密だが若干隙間が窺える。外面は体部下半のミガキが減り始めている。304は丸みの帯びる体部を有する。三角高台。見込みには連結輪状の暗文を施す。内面は密に磨く。外面は下半まで磨くが、隙間が大きく見られる。瓦器碗の年代から概ね12世紀中頃、土師器皿も概ねその頃の時期と思われる。

**SD292** 土師器皿などがコンテナに1箱出土。305は小皿。二段ナデで、口縁端部は若干内湾気味である。306はコースター形。底部外面は窪む。307は回転台土師器皿。12世紀前半頃。

**SE589** 土師器皿・瓦器碗がコンテナに0.5箱出土。掘方では308が出土。古相。SD496の南肩を一部切っているため、308はSD496に伴う混入遺物と考えられる。309は「て」の字形口縁を有する皿。厚手化し、口縁の成形も曖昧である。310は外反気味の二段ナデを有する皿。口縁端部がやや尖り気味である。淡赤褐色。V古的。12世紀初頭。

**SP49** 土師器皿・瓦器碗がコンテナに0.5箱出土。311は土師器大皿。大皿は褐色で、口径15.4cm、口縁端部は三角形を有す。312は瓦器碗。内面のミガキは隙間が多く見られる。外面は体部中央まで磨く。器高は浅くなっている。12世紀後半。

**SK395** 土師器皿・瓦・瓦器がコンテナに5箱出土。313はコースター形の皿。ナデが底部まで及び、若干底部外周がナデにより窪んでいる。口径9.2cm。314～324は小皿。322～324は淡赤褐色を呈する。いずれも二段ナデを施し、底部外面中央を押し上げている。やや厚手で口径が他より大きい。口径10.2～10.6cm。在地の可能性が考えられる。314～321は全体として口縁部がやや内湾し始め

ている。一個体の中でも一段ナデと二段ナデの両方を有している。口径9.9～10.4cm。319・320はやや新相の形態が見え、口縁端部が三角形を有しはじめている。口径9.5～9.9cm。325～327は大皿。口径14.5～15.0cm。327は明褐色で、一段ナデを有する。深手である。325は淡褐色で、口縁端部はやや直立している。328～330は瓦器碗。口径14.4～14.7cm。328は外反する口縁を有し、厚手である。内面のミガキは密だがわずかに隙間が窺え、外面も体部下半まで磨いているが、隙間が多くなっている。329は328より薄手で、外反する口縁に三角高台を有す。高台径が小さい。内面のミガキは密だが若干隙間が見られる。外面は体部中央まで磨く。330は体部外面にミガキが見られない。共伴する瓦器碗と比較すると新相を呈し、13世紀に比定したいが、法量面で共伴する瓦器碗とほぼ同じであることから、共伴関係の中で最も新相を呈するものとして捉えたい。12世紀後半。

**SK375** 土師器皿・須恵器・瓦・瓦器・貿易陶磁器類・木製品などがコンテナに5箱出土。331・332はコースター形。口径9.2～10.6cm。331は底部までナデが見られるが、332は底部までは見られない。平らな底部に口縁部を尖り気味におさめる。333・334は小皿。SK395より体部が外に開いている。口径9.8～10.0cm。335～341は大皿。口径13.6～14.8cmに見られる。二段ナデで、口縁端部の外反するもの(336・339)から、やや内湾し始めているもの(337・338・340)、一段ナデで深手のもの(341)が見られる。335は口縁端部を強めに内傾させている。337は見込みに穿孔を施す。342は白磁の碗。343は回転台使用の糸きり皿。344～347は瓦器碗の高台部。いずれも見込みに連結輪状の暗文を施す。347は見込みにジグザグ状の暗文を施す。348は土師質の鉢の底部か。底部外面に三足痕が残る。349は短かい口縁を有する灰釉陶器の壺。口縁端部は丸くおさめる。体部外面に降下釉が見られる。胎土は緻密で、白みがかった須恵質。破片も小さく、産地の特定は今後の検討としておきたい。堆積状況でSK395・SK396より下に位置するが概ね近い時期のものとして捉える。12世紀後半。

**SK396** 土師器皿・瓦器碗・瓦・木製品・貿易陶磁器類などがコンテナに15箱程出土。土師器皿は小皿が大多数を占める。350はコースター形。351～366は小皿。二段ナデと一段ナデが見られるが、いずれも口縁部が内湾気味に立ち上がるものが多い見受けられる。356は見込みの一方ナデの範囲が極めて狭い。体部からの横ナデが見込み付近まで及ぶ。法量9.8～10.4cmに見られる。361～365は器形が底部と体部の境が明瞭になり始めている。口縁端部は直立するものから、若干内側に入るいわゆる面取り風にナデている。法量が9.5～10.2cmに見られ、縮小傾向が見て取れる。380・381は瓦器皿。口径10.0cmに見られる。先述のSG410に見られる瓦器皿より、ミガキが粗雑化している。大皿はSK375よりナデが不明瞭になり、口縁端部の外反は基本的に見られず、端部を上方につまみあげるものが多い。法量14.2～15.2cmに見られる。376・377は口縁端部を三角形にし、口径が大きい。367は土師質の墨書土器。外面はニモノリと判読できる。378は回転台土師器皿。379は土師器台付皿の高台部。382は瓦器碗。見込みに連結輪状の暗文を施す。内外面のミガキは見られない。先述のSK395・SK375より若干新相の様子が窺えることから、V期新～VI期古、12世紀後半～13世紀初頭。

**SD493** 土師器皿などがコンテナに6箱出土。上層から383～397・402～407が、下層から398～401が出土。上層はSK395・SK396より体部の直立する個体が多い。上層では小皿は三つに分けることができる。383～387は二段ナデで、器壁が下層に類似し、口縁部はやや外に開く。法量は10.0～10.2cm程。388～394は法量9.6～10.1cmで、前者より体部が内湾し、端部が直立している。395～397は平らな底部に三角形の口縁端部を有する。やや薄手をし、口径が前者より小さい。大皿は402～405の内湾する深みのある体部を有するものから、406・407のような、京域VI期に繋がる器形が見られる。SK375・SK396と法量面ではほぼ同じだが、器高が高くなり、深手化している。

VI古併行、12世紀末～13世紀前半頃。

SE476 土師器皿、瓦器・瓦質鍋・土師質羽釜・貿易陶磁器類・須恵器・瓦などがコンテナ5箱出土。土師器小皿は口径8.0～9.0cmに見られる。褐色を呈する胎土が多い。平底気味で外反する体部に、口縁端部は三角形の面取りをするものとしめないものが見られる。大皿は薄手化している。法量11.4～12.8cmに見られる。赤褐色と褐色の二色がある。褐色の皿は厚手で、在地を感じる。423～432は口縁端部のつまみ上げが顕著である。口縁端部の形状は明瞭につまみ上げるものと丸みのあるつまみ上げが見られ、後者が多い。しかし全体の器形は概ね共通している。433はかなりの厚手であり、他の器形と異にする。京域では見られない器形である。赤褐色。434は白色の胎土で、京域で見られるものと類似している。436は瓦器の輪花碗。体部にへらで押圧した痕跡が残る。楠葉産。437は白磁の口禿げ皿。438は龍泉窯青磁碗高台部。439・440は大和型羽釜口縁部。鏝は退化している。439は口縁端部を内に折り曲げる。薄手。440は口縁を内に入れたのち、端部を外に折り曲げる。441は瓦質鍋口縁部。442は東播系須恵器鉢。口縁部が肥厚している。その他東海系の鉢の口縁部が出土している。概ねVII古～中的、13世紀後半～14世紀前半。

#### 木製品・有機物

古墳時代から中世の各遺構面で多くの木製品・有機物が出土している。出土資料のうち、残りがよく特徴的なものを選別し図示した。詳細は別表に記載することとし、ここでは時代別に出土遺物の概要と特徴的な遺物を説明することとしたい。

古墳時代 いずれもSD302から出土した。図示した資料の他に杭や、自然木などが多数出土している。製品には一部を欠損したものが多く、完形品はほとんど認められない。また、製品・自然木ともに焼けた痕があるものが多いことが特徴的である。このような遺物の特徴から、集落で使用されたものや、流路の護岸等に使用されたものが廃棄されたものと考えている。器種は、容器・農工具・装飾具・建築部材等豊富であり、近隣に想定される集落で使用された木製品の多様性を示すものと思われる。容器には4・8・9・10の削り貫き成形のもの、24の曲物底部がある。9は高杯であるが、半分に寸断されており、破面側に2つの孔が穿たれていることから、二次加工が想定できる。農工具には1・2・3の農具と、6・25の織機部材がある。18は堅櫛である。表面に黒漆の痕跡があるが、残りはよくない。建築部材と考えられるものには5・7・12・13・16・17・21・22がある。5・7・13・21は組物部材と思われる。いずれも一部が欠損している。12・17は板部材である。表面にヤリガンナによる成形痕が認められる。22は扉部材である。二次加工により大きく欠損しているが、把手の成形痕跡が認められる。16はホゾ加工を施した柱部材であったと考えられるが、二次加工により大きく形が変わっている。13・14は祭祀具の刀形木製品と思われる。23は琴部材と思われる。一部が欠損しており二次加工されたと思われる。この他、用途不明品として11・15・19・20がある。15は年輪年代測定法によりA.D.389の年代測定値が算出された資料である。表面に成形痕が認められ、農工具の未成品か二次加工品と思われる。19はホゾ加工が施された板材である。何らかの組物部材と思われる。20は丁寧に成形された用途不明の棒状製品である。建築部材か織機の可能性もあると考えている。この他、有機物としてシジミの殻皮(写真図版36-49～52)、瓢箪(写真図版36-60)が出土している。シジミは土師器小型丸底壺(図面図版20-92)の中に11個入っていた。瓢箪は容器として使用された可能性もあると考えている。

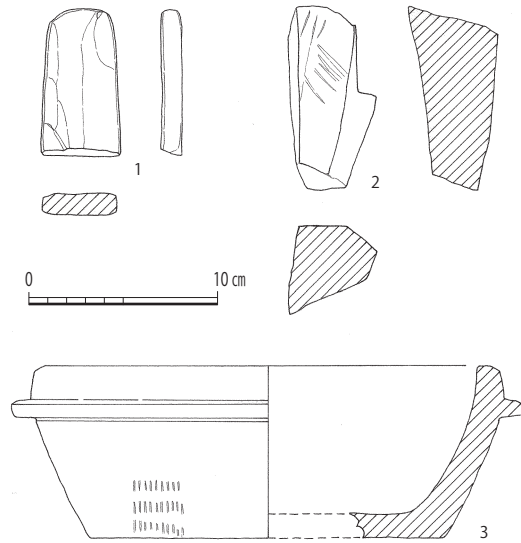
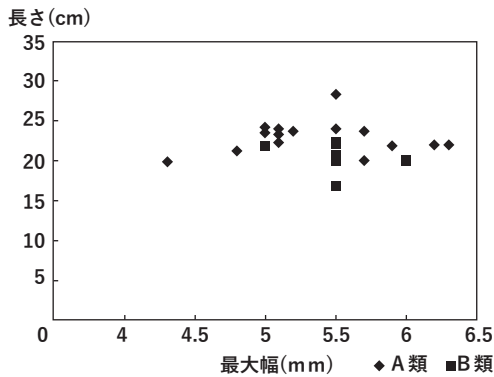
平安時代以降 土坑や井戸から出土している。図示した資料の他に、箸や不明板材などが多数出土している。多くは使用後廃棄されたものと思われるが、一部祭祀具もある。器種は、容器(29・30)、農工具(32)、服飾具(26・28・31)、食器(写真図版37-44～52)、建築部材(34・35・36)、祭

祀具 (33)・用途不明品 (27) がある。26 は簪である。複数が出土している。28・31 は下駄である。図示したのは一体成形のものであるが、組合成形のものも存在する。35・36 は簾部材である。33 は板材であるが、土坑に突き刺した状態で検出され、表面に「大安唵急」の墨書があった。近世のものである。この他 SK396 からは多量の簪が出土している。表 1 に法量分布を示しているが、両端を先鋭に仕上げるもの (A 類) と、一方の端部を先鋭に仕上げ、他方は切り落とすもの (B 類) に分類でき、A 類は B 類に比してやや大型の法量をもっていることが指摘できる。

石製品 石製品もわずかに出土している。砥石と滑石製石鍋で、出土量は極めて少ない。石鍋は 12 世紀後半。石臼や茶臼については付載 5 で観察結果を報告している。

表 1 SK396 出土簪 (完品)

番号	長さ (cm)	最大幅 (mm)	分類	番号	長さ (cm)	最大幅 (mm)	分類
1	23.9	5.5	A	17	25.2	6.9	A
2	22.1	5.1	A	18	21.6	5.1	A
3	23.1	5.1	A	19	23.2	5.0	A
4	22.0	6.3	A	20	21.8	5.2	A
5	19.9	4.3	A	21	23.4	5.1	A
6	13.2	5.1	A	22	22.1	5.1	A
7	21.9	6.2	A	23	18.6	5.0	A
8	28.2	5.5	A	24	24.5	6.0	A
9	24.0	5.0	A	25	21.7	5.0	B
10	20.0	5.7	A	26	16.8	5.5	B
11	23.4	5.0	A	27	2.1	5.5	B
12	23.5	5.2	A	28	21.8	5.5	B
13	21.7	5.9	A	29	19.8	5.5	B
14	23.9	5.1	A	30	19.7	6.0	B
15	21.2	4.8	A	31	19.9	6.0	B
16	23.5	5.7	A	32	22.3	5.5	B



第 9 図 石製品実測図

## 第V章 まとめ

今回の調査では、古墳時代から近世にかけての多くの遺構を検出することができた。特に古墳時代と平安時代においては数多くの貴重な成果を得ることができた。最後にその調査所見を極く簡単にまとめて終わりとしたい。

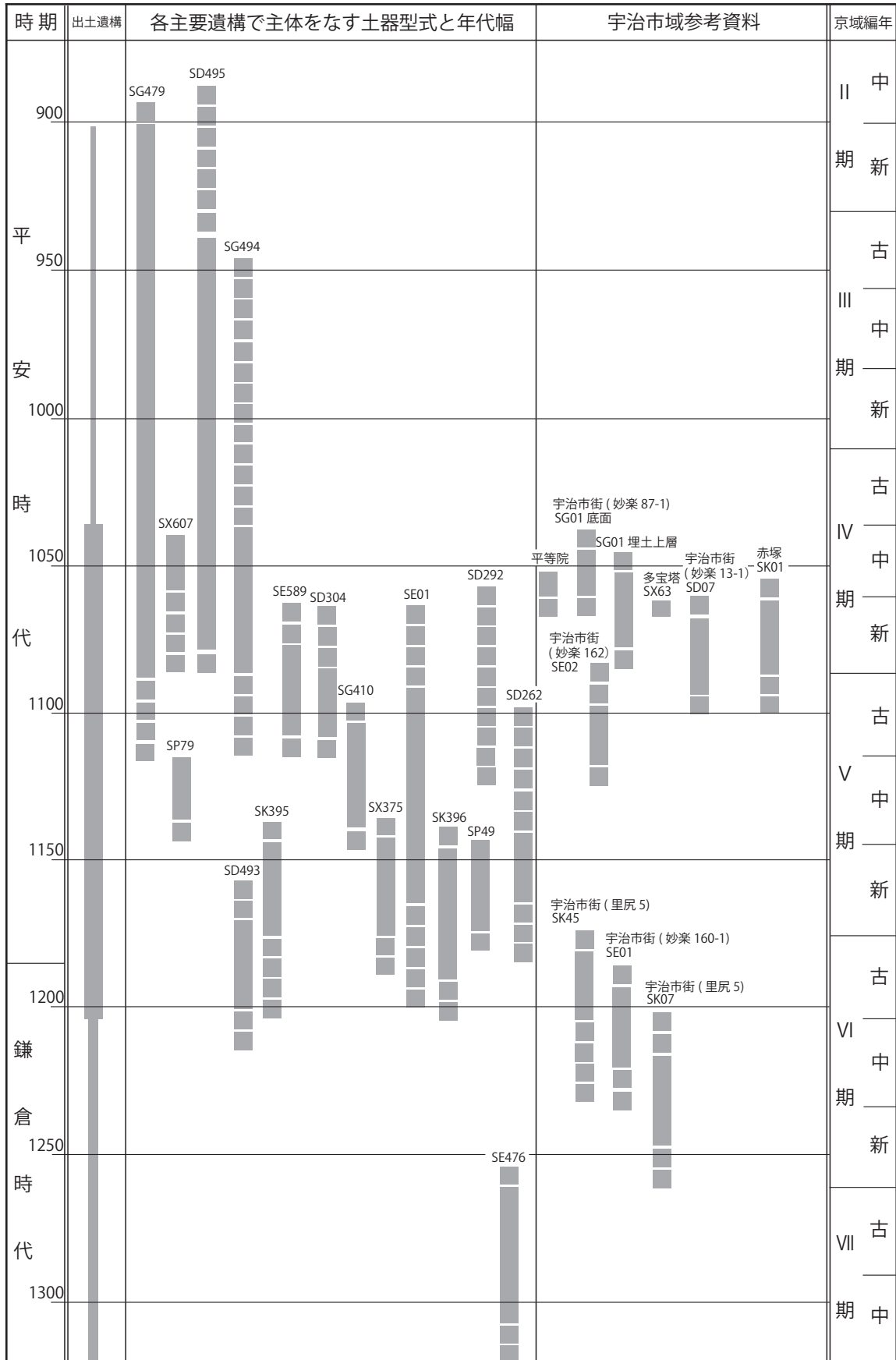
### 古墳時代

調査区内で検出された明確な古墳時代の遺構はSD302のみであるが、様々な発見と課題が明らかとなった。それらを整理すると以下の3点に集約できる。1点目は、出土土器の編年的位置と共伴する木製品の年輪年代測定結果の評価である。2点目は、韓式系土器（植野1987・今津1987）の評価と渡来人との関連についてである。3点目は、遺構の評価と周辺の状態である。

**出土土器の編年的位置と年輪年代測定** SD302出土土器は、ほとんどが遺構底部に集中して出土し、遺物溜りを形成している。初期須恵器・陶質土器の特徴から、全体としてTG232型式併行期の消費地における一括資料として評価することができる。また土師器の編年からも埴形高坏の坏部の形状と大型有稜高坏が出現していない点からも、これを補強できる。しかし、A.D.389という年代測定値が算出された木製品は、土器と同時に廃棄されたことは確実と考えられるが、未成品か二次加工品か不明であり、今回の成果のみをもって須恵器生産の開始年代を4世紀末と断定することは難しいといわざるをえない。ただし、平城宮跡東朝集殿下層SD6030の成果を踏まえると（光谷・次山1999）、TG232型式併行期が4世紀末にさかのぼる可能性が、十分検討可能になってきたといえるのではないだろうか。

**韓式系土器と渡来人** 出土した韓式系土器には初期須恵器・陶質土器と軟質土器がある。軟質土器については、器種が豊富であること、平底鉢が多く出土していること、そして朝鮮半島南部の土器製作技法に忠実であることから、渡来人の存在を想定することができる（今津1987、亀田1993）。また、陶質土器については、伽耶西南部、金海・釜山西南部、小伽耶地域などの系譜が認められ、これらがまとめて廃棄されていることから、複数地域からもたらされた土器が同時に使用されていた可能性が高い。これは、古墳時代中期初頭の初期須恵器・陶質土器の流通と使用、そして渡来人との交流関係について重要な課題を提示するものといえる。

**SD302の性格と周辺** SD302はやや湾曲気味に膨らむ浅い流路跡であり、遺構北側岸に小円礫が州浜状に広がるという特徴をもつ。流路に礫敷きを施す例としては、三重県城ノ越遺跡など祭祀に関連する遺構が挙げられる（三重県1997）。SD302礫敷きは人の手が加えられたものと思われ、祭祀具の刀形木製品も出土している。ただ、出土遺物構成と廃棄の状況から、SD302のごく近くに居住域が存在していた可能性も考えられる。現時点では、SD302の性格については以下の二つを列挙しておくに留めたい。一つは、SD302は居住域に隣接した流路であり、日常的に生活品の廃棄が行われ、その中で祭祀も行われたとするものである。二つは、SD302が何らかの特別な祭祀に伴い造られたものであり、各種器物を一斉に投棄し、祭祀をおこなったとするものである。宇治市域の古墳時代集落としては、これまで菟道遺跡など宇治市北東部に成果が多く、宇治川河口域の状況は明らかではなかった。今回、宇治市街遺跡において古墳時代中期初頭の集落の存在が示唆されたことは、宇治川と巨椋池の開発など、宇治市域の古墳時代を考える上で重要な資料となるであろう。また、宇治市街遺跡周辺では、平等院旧境内下層遺跡においてL字型造り付けカマドを有する中期初頭の竪穴式住居が



第 10 図 各主要遺構の土器型式からみた時期的変遷

みつかっており（宇治市 1994）、今回の成果によって、宇治川河口域に渡来系文化との交流関係をもつ集落が、古墳時代中期前半期に広く展開していた可能性を考えることができるようになったといえる。

### 平安時代

平安時代では多くの遺構・遺物を検出した。時代順に主要なものをみていくこととする。平安時代前期～中期では園池や溝等を検出した。これまで宇治市街地域において、平等院創建期前の遺構が確認されたのは今回が初例となる。これらが最終的に埋没したのは 12 世紀前半のことである。これら園池を有した邸宅については、周辺に礎石は残るもののいずれも柱間が不揃いであり、建物の復原までには至らなかったが、平安時代に入ると、宇治には貴族の別業が複数存在していたことが文献史料上では窺える。平等院も藤原道長の別荘宇治殿をその子頼通が寺院としたもので、道長がこの別荘を源重信夫人から取得したのは長徳 4 年（998）のことであったと伝える。このような藤原氏による平安期の別業については、他に小川殿、小松殿、西殿、池殿、沢殿などを記録にみることができる。平等院創建前に園池を有した邸宅の主については現状では特定できないが、記録の上では宇治に邸宅を構えた人物として桓武天皇皇子明日親王あるいは播磨守賀陽豊年が知られる。

その後、園池等は埋め立てられ、園池の上には新たに礎石建物等が構築され、当該地の土地利用に大きな変化が生じる。これは 1101 年に藤原忠実が平等院の修理を指示する記述が残ることから、何らかの政治的作用によって園池が廃絶の途に向かった可能性が考えられる。

A 発掘区北端では道路跡とその側溝を検出した。これまで宇治市街地域における平安時代の道路遺構の検出は、J R 奈良線宇治駅改修工事に伴う発掘調査の 1 例があり、道路側溝とその道路跡が検出されている。今回検出した道路跡はそれと同一直線上に位置することから、一連のものと考えられる。さらにこの道路跡は現在の伍町通りとも重なっていることがわかる。このことから、現在の宇治市街地域に残る碁盤目状の地割が平安時代までさかのぼることが判明した。このような街並の施工開始時期については、出土土器から 11 世紀後半頃と考えられ、平等院創立に伴って藤原頼通から続く一門による土地整備が行われたものと考えられる。

12 世紀前半では築地塀・園池・井戸・柱穴等を多数検出した。道路を介して北側と南側とでは遺構の様相が異なる。北側では道路に近接する位置に小柱穴や作りの粗雑な井戸が見られる一方、南側では園池・礎石建物群・築地塀等が見られる。このことから、道路の北側には一般庶民層の集落空間が展開し、南側には貴族の別業空間が展開していた可能性が考えられる。12 世紀後半になると道路の南側で大型土坑が見られるようになることから、当該地が衰退の一途をたどるものと考えられる。

今回の調査では平安時代前期～後期までの遺構を多数検出した。なかでもこれまで不明であった平等院創立前の考古学的成果を得ることができ、藤原道長が宇治別業を取得する以前の様相の一端を知ることができ、宇治の土地景観を復元する大きな成果を得ることができた。また、現在の宇治市街地域に残る碁盤目状の地割が平安時代後期までさかのぼることが判明し、平等院創立後に藤原頼通から続く一門によって宇治の土地整備がなされたことは間違いなく、現在我々がみる宇治の原型ともいべき一つの風景が確立されたものと考えられる。

### 鎌倉時代

13 世紀に入ると小柱穴を検出したものの、遺構や遺物ともに平安時代に比して量は少ない。過去の調査例では道路の北側において、宇治市街遺跡（里尻 5）で 12 世紀末～13 世紀代の遺構が多く検出され、宇治市街遺跡（宇治代官所跡）で 13 世紀初頭の遺構が検出されている程度である。13 世紀後半では井戸を検出したものの、この時期に属する遺構は過去の調査例でも少なく、点的な確認しか出来ない現状である。今回の成果により、資料に乏しい 13 世紀後半の遺構が道路より南に存在する



第 11 図 宇治市街遺跡 [川西地区] の主な発掘調査地点  
 (杉本宏「権門都市宇治の成立」『仏教美術』279号掲載図4を加筆)



第 12 図 出土した主な近世遺物

ことは 12 世紀後半～末頃に一度衰退の途についた当該地がこの時期に再び土地利用され始めることを示すものと評価できよう。

#### 室町時代から江戸時代

14 世紀以降では包含層で土器の出土は見られるが、遺構は見られず、その詳細は不明である。宇治の茶師が最盛期を迎える 16 世紀後半以降は、当該地は茶師の家屋が集中して構築されており、遺物・遺構ともに増加する。

今回の発掘調査は、非常に多くの重要な成果をあげ、また数多くの方々にご意見をいただいたもののその多くが消化不良で今後多くの課題を残す結果

となってしまった。ただこの報告書を機に多くの研究者に活用してもらい、多角的視点での遺跡の評価を進めてもらいたい。最後に現地調査ならびに報告書作成には大原瞳さんの努力なくしては成立しえなかったことを結びとしたい。

#### [引用・参考文献]

植野浩三 1987「韓式系土器の名称と分類」『韓式系土器研究』I 韓式系土器研究会  
 亀田修一 1993「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』第 30 集(中)九州古文化研究会  
 光谷拓実・次山淳 1999「平城宮下層古墳時代の遺物と年輪年代」『奈良国立文化財研究所年報』1999 奈良国立文化財研究所  
 今津啓子 1987「大阪湾岸地域出土の朝鮮系軟質土器」『東アジアの考古と歴史』(下) 岡崎敬先生退官記念事業会  
 宇治市教育委員会 1994『平等院旧境内多宝塔推定地第 1 次発掘調査概報』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第 24 集  
 三重県埋蔵文化財センター 1997「城之越遺跡 鷺ヶ尾古墳群発掘調査報告」三重県埋蔵文化財調査報告第 146-10 集  
 中井淳史 2004「付章 宇治地域出土の中世土器編年」『宇治市街遺跡発掘調査報告書(宇治里尻 5)』宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書第 55 集 宇治市教育委員会